
真剣で僕は恋できない？

次元賄賂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で僕は恋できない？

【Nコード】

N4248BA

【作者名】

次元賄賂

【あらすじ】

マジ恋のやりすぎで過労死した転生オリ主こと藤堂邦弘、そんな彼がマジ恋世界で送るありきたりな物語

プロローグ

転生、それは二次創作において語るまでもないもの。

テンプレ系転生オリ主、アニメや漫画、ゲームの世界に転生して、神なる超越存在からチート能力やハイスペックな身体能力や頭脳をもらい、転生者最大のアドバンテージである原作知識、前述のチート能力を使つて無双し、原作キャラと仲良くなり、あわよくば結ばれ第二の人生を幸せに送る。

こんな妄想をした人は何人いるんだろうか？

いや、僕もその中の一人か。

これは2009年8月28日に発売された『真剣で私に恋しなさい!』というAVGを早朝から店に並び購入して、夏休みが終わる8月31日に全ルートを2週目したところで過労死した僕が何の巡り合わせ、何の星巡りかは知らんが、このゲームの世界に転生し、トコトン突き進む話だ。

用意はいいか？

踏み出す勇氣は持ったか？

勇往邁進の精神は忘れてないか？

この気構えを持ってないと、とてもあの世界は渡れないぜ。

なんだって、アイツらは一筋縄じゃいかねえからな。

プロローグ（後書き）

年末からお正月にかけて、実家にいたのですが…。

自分の部屋を掃除したら、奥から出てきたノートにプロット状態のマジ恋とリリカルなのはのssを見つけてしまい、どうしたもんかなーと悩んだ挙句、投稿することに決定しました。

第一話 物・語・開・始

よっ！オレ、サト、じゃなかった。ゴメンナサイ。

こんにちは僕、藤堂 邦弘とうどう くにひろっていいいます。転生者です。

マジ恋のゲームやってて過労死して、なんの因果か知りませんが、このマジ恋の世界にめでたく？転生しました！

赤ん坊から転生することができたんだから、やることは一つ、幼少期の風間ファミリーに介入することを誰もがやるうとするんじゃないんでしょうか？

そんなことは僕にはありえませんでした。

なぜかって？そんなの決まってるじゃないですか！

生まれは川神でも、育ちは松笠と七浜なんですよ！

なに、この生殺しみみたいな環境？椎名京のフラグ立てられないじやん！

まあ、僕の邪な欲望は置いていて。

どうやら僕の生まれた家は、どうも武士の家系らしいんですよ。藤堂って滋賀県じゃなかったっけ？

そのため僕は武術を修めることになるんですよ、体動かすの嫌だったんですけど。前世がモヤシツ子だっただけに。

でも、両親と姉はやめさせてくれない。僕には武道の才能と素質があるとかいって、修業ばかりさせられました。四歳から中学校卒業までミツチリとね。

さて、僕が住んでいた所は松笠です。当然目をつけられましたよ、竜鳴館の橘平蔵に。武道四天王の鉄乙女ともどもに鍛えられ、すごかったですよ。

七浜では久遠寺家の大佐から上杉錬の練習相手みたいなことやったりと、九鬼揚羽と死合したりと成長イベントには事欠かなかったです。

ここまで来ると僕は川神百代とガチでタメ張るぐらいの実力がついてしまいました。いや、ついてしまったかな。

どーすんの、コレ？

僕自身、武道の修業させるって聞いたときはそれなりに強くなればいいなって、少なからず思ってたんですけど。

まさかここまで、才能と素質があるって聞いていましたけど、チートレベルだなんて誰が予想したでしょうか？

勉強はどうしてたかって？ 簡単ですよ、前世の知識と効率のいい勉強方法のおかげですぐに成績はトップです。一番です。

あまりの文武両道さに周囲の大人たちは？松笠の麒麟児”だの？七浜の武神”とかいってます。言われて悪くないなー、って思ったことは内緒ですよ？

さてと、自己紹介みたいなのはここまでにして。

現在、僕は川神学園の一年生。

あっ、黛由紀江こと、まゆっちはいませんよ。

直江大和と愉快的仲間たちと同じ年に入学しましたから。

入学早々、川神百代に目をつけられて勝負を挑まれるかなーって、思ってたんですけどね。別にそんなことはありませんでした。

だってあちらさんは気付いてないんですよ、僕のこと。そりゃ、彼女の祖父である川神鉄心にしかるべき時が来るまで黙っていてほしいと頼みましたけど。入学して1カ月もたてば不思議に思います。

ふう〜、そろそろ現実逃避はやめようかな。

「ねえ！ アタシと勝負しなさいよ！」

目の前にいるこの娘をどうにかしよう…。

原作メインヒロインの一人、川神一子

まーだ、原作は始まっていないぜ。

物語は始まったけどな。

大丈夫だよ。予想外な事が起きまくってるだけだから。

第二話 犬・娘・必・敗（前書き）

携帯からの投稿になりますので文脈がおかしかったりします。

すぐに修正をいれますが、いまはこれでお願ひ致します。

スマートフォンってやりにくい。

第二話 犬・娘・必・敗

「えーと、川神一子さんだっけ。どうして僕と勝負をしたいのかな？」

「そんなの決まってるわ！あんたが強いからよ！」

「だからどこで僕が強いつてことを聞いたの？」

ダメだ。やっぱりメインヒロインは手に余る。

おい、直江大和、そして椎名京。見てないで何か言ってください。

「おじいちゃんが電話で言ってたわ。お姉さまとあんたが死合することを決めたつて」

「つまりなんだ？川神百代と戦う＝強い。だから決闘しろと？」

「その通りよ！」

スパーンと僕の机にワッペンを叩きつけてくれた。
やめる、クラス中が見ている。

「さあ、どうするの？決闘するの？しないの？」

正直言つて僕が彼女と戦う意味ってないんだよな。
僕の一方殺が決まっちゃうから。

でもこれ以上原作から離れるても仕方ないし、受けますかね。フラ

グ立てのために。

僕は上着のポケットからワッペンを取りだし、静かに重ねた。

「その決闘受けよう。これで受理されるはずですよ、学園長？」

「うむ、その決闘許可しよう」

「じいちゃん！いつの間にかいたの？」

どのタイミングで教室に入ったんだよ。全然気付けませんでしたよ。

「ホツホツホツ。いやあなに、たまたま教室の前を通りかかったら威勢のいい声が聞こえての」

本当にたまたまかあ？このエロジジイ、なんだかんだ言って孫にや甘いからな。

「藤堂もすまんろう。百代との死合を予定してるにも関わらず、一子の受けてくれてな」

「別に構いませんよ」

川神百代との死合を申し込んだのは僕じゃない。川神鉄心、このジジイが入学したときに、相手として頼み込んできたのだ。川神百代の戦闘への衝動を和らげるための最終手段としてね。

「まさか姉と戦うのではなく、妹が先に戦うことになるのはのう」

「まったくどうしたのですかね」

「では、なるべく今日中に出来るようにしておくからの」

「お願いするわ!」

「よろしく頼みます」

その後、昼休みの放送で決闘は放課後に行われることが決定した。

side 直江大和

「ワン子、藤堂の情報、調べてみたぞ」

「あつ、大和。どうだった?」

昼休み、俺、京、モロ、ガクト、ワン子で集まり、俺が人脈で手に入れた藤堂の情報を元に対策会議が開催されていた。

今日はキャップはいない。また何処かでメシでも食ってるんだろう。

「まず確実に言えるのは、藤堂はそれなりに強い。昔は松笠と七浜に居たらしいんだけどな、そのときに川神院帰りの武道家を何人も倒しているらしい」

松笠と七浜に住んでいる人の情報だし、実際に戦っているところを見たって言ってるヤツもいるから確定情報だろう。

「川神院帰りってことは、モモ先輩と学長にまけたヤツらの後始末みたいなことをしてたってわけか?」

ガクトが身を乗り出して言う。後始末って言い方は違っんじゃないか。

「後始末じゃなくて、負けて帰るわけにいかないから、せめてランクの低い相手に勝とうとして、挑んだってことが正しくない？ガクト」

モロがすかさずフォローをいれる。それに対し、ワン子は。

「川神院に挑んでくる武道家に勝てるぐらいには強いってことね！俄然燃えてくるわ！！」

ご覧の通り、ヒートアップしっぱなしだ。

「で、大和。他に情報はないの？使う武器とか、弱点とか」

「弱点は特に聞いていない。でも武器に関しては日本刀使ったり、大剣使ったり、狩猟笛とか、盾だけで戦って勝ったっていう武勇伝がいっぱいあるからよくわからん」

「多数の武器を使っつてことかしら？」

「違うよ、多分剣道とかヤツテルト思っつから日本刀を使っつてくるはず」

「はあ？どっつてそう言い切れるんだよ」

「上手く隠しててわからなかったけど、ワッペンを取り出すときに見えたの。竹刀ダコ」

「……あつ！」「」

剣道や弓道、スポーツでもそうだ。バットを振っていると、手のひらの特有の部分がマメになり、潰れタコになる。

京はそれを見たのだろう。

「ナイスだわ、京！これで使う武器はわかったわ。刀を使ってくるのなら、薙刀を使うアタシが有利だわ！」

「ていうか、よく見えたね。そんな細かいところ」

「弓使いは目が命。大和、私役に立ったでしょう？だから付き合ってた」

「お友だちで」

うん、いつも秘密基地でよくある光景だ。

だが、気がかりなのは学長と藤堂の会話だ。

あの内容だと、ワン子はもの凄く下に見られてる気がする。学長はいいとして、藤堂はそんなことを言える立場なんだろうか。

「ワン子」

「なーに？大和」

「負けるなよ、いつものペースでいけば勝てるぞ」

「当然よっ!」

side 藤堂邦弘

時間がたつにつて早いね。もう放課後ですよ、決闘の時間ですよ。第一グラウンドには結構人が集まってまして。

「決闘トトカルチョやってるよ!」

「ポップコーンいかがですか!」

原作にもあったけど、ここまで商魂逞しいと感動してしまうな。

さうで、対戦相手の川神一子さんは、風間ファミリー（ただし風間翔一はいない、どこいったんだらうね）の面々に励まされてますね。

でも一番気になるのは、直江大和の後頭部に大きなオツパイを押し付け、のしかかっている川神百代さんなんですよね。

ちくせう、羨ましいです。

僕だってあのオツパイ揉みたいです。

敢えて言おう!直江大和モゲロ!!!

これで文句言うお前は、贅沢だ!贅沢は敵だ!

「両者、前へ!」

おっと、そろそろ始まりますね。

教室にあった、この模造刀よくできていますね。

「では双方準備はいいな？」

「ええっ！！」

「ああ」

「では、始め！！」

「せりゃああ！！」

開始の合図とともに、一子さんは気合いを放ちながら薙刀を上段に構え振り下ろす。

それを僕は刀の鍔で防ぐ。

「なんの！」

僕がかわさないことを良いことに次から次へと刀の間合いに入らないように斬撃をくりだし、それを刀で防ぎ続ける僕。

始まってから一步も動いていないのに気付かないのかな？

「山崩し！」

おっと！足への攻撃はやめてよ。せっかくの縛りプレイなのに。

「守りが固い」

「そうじゃなくて、君が未熟なだけだよ。そんな攻撃じゃ僕を動かすことなんてできないよ」

一子さん、君は本当に話にならないよ。

君より、さつきからまともに戦えと敵意を飛ばしてくる川神百代とやるほうが有意義だ。

もういいや、飽きた。終わらせよう。

雑刀を回転させて力を溜めているところに僕は刀を抜き、斬撃を飛ばした。

「蒼波！」

「きゃうー！」

さすがに防御態勢とってないとぶっ飛ぶね。

手加減は当然したけど、本式で打ったら上半身と下半身がお別れしちゃう。想像したくない、したくない。

「そこまで！勝者、藤堂邦弘！」

ギャラリィは好き勝手に騒ぎ、愉快的仲間達は敗者を慰めに。そして僕は更なるメンドウがあらわれる。

「おい、勝負しろよ」

どうせなら、姉妹丼で来てくださいよ。

川神百代先輩。

で。これ結局、旗たつたの？
違う旗なら立った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4248ba/>

真剣で僕は恋できない？

2012年1月12日00時52分発行